

研究ノート

“LAR (生きられた古代宗教)” のアプローチによる古代宗教研究

—地中海世界を事例としたその適用の可能性を巡って—

土居 由美*

1. 初めに

本稿では、1990 年代後半以降に発展した “Lived Ancient Religion (生きられた古代宗教=以下 LAR と記す)” の⁽¹⁾というアプローチに則して描かれた、イェルク・リュプケ (Jörg Rüpke) 氏による著書 *Pantheon* (2016)⁽²⁾ (特に第 1 章と第 2 章および 6 章までの流れ) を手掛かりとしながら、宗教研究を巡る視点及び LR というアプローチの適用による LAR 研究について一考する。初めに、方法論 “LAR” と “LR (生きられた宗教=以下 LR と記す)” 及び *Pantheon* に言及し、これらの内容を概観した上で、前者のアプローチをさらに広範な地域と時代に適用して宗教現象について検討する可能性について一考する。

2. “LAR (生きられた古代宗教)” というアプローチ

LAR というアプローチは、リュプケに拠れば、日々の現実の経験・実践・表現・相互作用に焦点を当てて宗教を再構成し、定義しようとするものである。LAR は、専門的な神学、教義学、制度、組織化された宗教の歴史について分析し、個々人がどのように一連の宗教的实践や信仰上の知的な教義を再現するのかという点に関心を寄せるものではなく、活動的な宗教共同体や最新の神学的潮流を扱うものでもない (Rüpke, 2012d)。

リュプケが対象とする空間は地中海古代世界であり、このことから LAR は、ロバート・

* 神奈川大学、駒澤大学、成城大学他非常勤講師

⁽¹⁾ Lived Ancient Religion – Questioning “Cults” and “Polis Religion” プロジェクト (LAR) は、European Research Council (ERC) の助成により 2013-17 年に編成されたものである。LAR は、地中海古代世界の宗教史について、都市や民族のみならず、個人と「生きた」宗教から出発し、多様な社会空間において個人によって流用され、表現され、共有される一連の経験や神に向けられた実践及び神への観念を描写するものである。同プロジェクトについては、エアフルト大学ウェブサイトで紹介された以下の内容を参照。https://www.uni-erfurt.de/en/research/researching/research-projects/lived-ancient-religion-questioning-cults-and-polis-religion. (最終閲覧 2023/6/17)

⁽²⁾ Jörg Rüpke, *Pantheon*, C. H. Beck, 2016.

オルシ(Robert Orsi)⁽³⁾やメレディス・B・マクガイア(Meredith McGuire)⁽⁴⁾らによって提唱され、主として現代アメリカという空間を射程に収めた「日常の宗教」や「民衆宗教」とは歴史的・地域的パラダイムを異にする(Rüpke, 2012d)。

リュプケは、LAR は上記の研究者らによって論じられた LR アプローチに含まれる方法論を、“Dead Religion(死んだ宗教)”に特徴的な証拠群⁽⁵⁾に適用して修正したものと述べる(Rüpke, 2012d)。即ち、LAR はローマを中心とする古代地中海地域の宗教を描写する従来の代表的な視点であった「儀礼」や「ポリス宗教」に代わる広範な代替モデルを提案し、通時的・共時的に個人の役割や宗教的経験に焦点を当てて「解釈」し、古代地中海世界の宗教を分析・記述する試みである⁽⁶⁾。

従って、LAR は神々或いは儀式の序列やシステムではなく「生きた宗教」に目を向けることを通して、古代の宗教的实践に固有の特徴やエピソード、宗教的変化の長期的プロセスをよりよく理解しようとする(Rüpke, 2012d)ものである。リュプケに率いられた LAR プロジェクトでは、時代としては青銅器時代末期から紀元 4 世紀までのイタリアにおける宗教団体とメディアの発展に関する多くのサブプロジェクトと個々の研究から得られた成果が纏められた⁽⁷⁾。地理的には、特にローマと中央イタリアの展開及びローマ帝国に加えて、シリアからイギリス諸島に至る異なる場所での発展との関連性も考慮された(Rüpke, 2012d)。手続きとしては、考古学的証拠と碑文及び文学的テキストが組み合わせられ、宗教的なコミュニケーションの諸戦略とその使用の競合、またこれらの行為に影響を受けた多様な社会空間に焦点を当てて検討された(Rüpke, 2012d)⁽⁸⁾ところに大きな特徴がある。これらの社会空間は、「家族」という第一の空間、「団体」という第二の空間、「公共機関」という第三の共有空間、「超地域的な文学的コミュニケーション」という第四の空間に向けた視点によって分類される。各々の分野において、帝政期の地中海沿岸のさまざまな地域の代表的で複合的な証拠群が提示され、各分野における伝統の担い手や宗教上のサービス提供者と個人の相互作用に関する横断的な分析によってそれらが結ばれる(Rüpke, 2012d)。LAR アプローチの方法論上の革新性は、宗教について、前述の如く宗教的経験・表現・実践・相互作用の中で形成される文化という視点によって定義されることを通して、シンボル・儀礼・テキスト文化という宗教を巡る現在の視点にこれらが取って代わること

(3) ノース・ウェスタン大学宗教学教授ロバート・オルシの研究は、同大学ウェブサイトで紹介されている。<https://history.northwestern.edu/people/faculty/affiliated-faculty/robert-orsi.html> (最終閲覧 2023/6/17)

(4) メレディス・B・マクガイア教授による Lived Religion の概要は、“The Religious Studies Project web site”で紹介されている。<https://www.religiousstudiesproject.com/persons/meredith-mcguire/> (最終閲覧 2023/6/17)

(5) 考古学的証拠と碑文や文学的テキストを指す。以下を参照。<https://www.uni-erfurt.de/en/research/researching/research-projects/lived-ancient-religion-questioning-cults-and-polis-religion> (最終閲覧 2023/6/17)

(6) 同上参照。

(7) 注 2 参照。

(8) <https://www.uni-erfurt.de/en/research/researching/research-projects/lived-ancient-religion-questioning-cults-and-polis-religion> (最終閲覧 2023/6/17)

が目指されているところにある(Rüpke, 2012d)⁽⁹⁾。

3. “Lived Religion(生きられた宗教)”というアプローチ

ここでは、LAR において古代地中海世界というパラダイムに適用された現代の宗教現象を検討する方法論である “Lived Religion(生きられた宗教=以下 LR と表記する)” というアプローチに言及する。

LR は、デイヴィッド・D・ホール (David D. Hall)、ナンシー・アーママン (Nancy, T. Ammerman)、マクガイア、オルシらによって、1990 年代以降に提唱され、現在まで展開を重ねた宗教研究の方法論である。社会及び社会的な場に存在する宗教とは何かという問いを立て、これにアプローチしていく方略が取られる。この観点からいえば、宗教は実践として理解されるのだが、それは特徴的な意味においてであるとされる。本アプローチは、人々の「日常生活の中で宗教がどのように実践されているか」ということを研究するために適用されるものであり、言い換えれば、宗教は人々の「日常生活の中での実践や経験」と捉えられる。故に、人々が宗教的な意味を見出したり実践したりする方法を理解するために、個人の経験や物語、儀礼や祈り、聖地などが究考される。宗教が人々の感情や思考、行動、社会的なアイデンティティに与える影響を理解することが重視され、故に、宗教現象分析において、人々の経験や文化的な背景、社会的なコンテクストを含めることが重要とみなされる。

以下では、LR アプローチをとる代表的な研究者とその言説について簡潔に概観する。

3-1-1 デイヴィッド・D・ホール

ハーバード大学神学部教授ホール⁽¹⁰⁾は、元来は 17-8 世紀アメリカの宗教研究者として知られる。彼はアメリカの宗教形成と発展について多くの著書を公にし、それらにおいて次のような主題について考察した。(1) 17 世紀のニューイングランドにおける一般的な宗教的信念や宗教的文化の形成⁽¹¹⁾、(2) ピューリタンがアメリカに到着した時にどのような宗教的信念を持っており、アメリカでそれをどのように維持したのか⁽¹²⁾等である。これらホールによる研究はアメリカの宗教史に関する深い理解を提供しており、同宗教文化への洞察に富む。LR との直接の関連性についていえば、*Lived Religion in America* と題する一連のエッセイ叢集における、贈答品交換、火葬、賛美歌の歌唱などの、生きた宗教的信仰を巡る *Toward a History of Practice* (実践の歴史に向けて) という随筆が基礎的集大成とみなされてきた⁽¹³⁾。

⁽⁹⁾ 同上参照。

⁽¹⁰⁾ デイヴィッド・D・ホールの研究の概要については、ハーバード大学ウェブサイトの要約を参照。https://hds.harvard.edu/people/david-d-hall. (最終閲覧 2023/6/17)

17 世紀のニューイングランド及びイングランドにおける宗教と社会の研究家であった。

⁽¹¹⁾ David D. Hall (1990), *Worlds of Wonder Days of Judgment: Popular Religious Belief in Early New England*, Harvard University Press.

⁽¹²⁾ David D. Hall (2004), *Puritans in the New World: A Critical Anthology*, Princeton University Press.

⁽¹³⁾ 以下の項は同書の内容に基づく。David D. Hall (1997), *Lived Religion in America: Toward a*

ホールは、LR は社会及び社会的な場における宗教に対するアプローチだが、社会学よりも宗教研究及びアメリカ宗教史に関する文化的・民族的アプローチに根ざすものと定義して、LR を宗教的な信徒の実践と彼らの「日常の思考」についての文脈と内容に関する研究と捉えている。ホールに拠れば、生きた宗教の研究は単一の方法や学問分野に依存するものではない。アプローチとして LR を用いることによって意味の解釈の幅が広がり、同時に歴史家も過去と現在を多角的に検討する機会を提供されるところに、意義があるとみなされている。

但し、ホールはパラダイムとしての LR は、流動的、移動可能かつ不完全な構造であるとも示唆してその限界も認め、LR を「不完全なツール」と呼び、信徒をダイナミックに調査したとしても、一人の人間の宗教的実践を完全に理解することは不可能であり、特に時間や場所など一つの場所からそれを要約することは出来ないという点も指摘している。

また、ホールは、大衆宗教を宗教的信念や実践における階層や対立に関心を持つものとして、生活宗教と大衆宗教とを区別している⁽¹⁴⁾。

このアプローチが歴史家や社会学者によって追求される場合には、実践は単なる行動以上のものを意味する。つまり、あらゆる伝統、教会、またはコミュニティが宗教的であるということは何であるかと問いながら、行動の在り様を通してその特質と境界が描かれる。

3-1-2 ナンシー・アーママン

アーママン⁽¹⁵⁾は、ボストン大学宗教社会学の教授である。最もよく知られた近年の研究は、*Everyday Religion: Observing Modern Religious Lives* (2006)⁽¹⁶⁾に掲載されており、宗教とスピリチュアリティは、仕事、家庭、健康、公共生活といった日常世界の一部であるとして、これらが探求されたものである。アーママンは、社会学的な実践理論及び LR に関する一連の研究に基づいて「宗教を再考する」ことを呼びかけたことでも知られる。これらについては、*Studying Lived Religion: Contexts and Practices* (2021)⁽¹⁷⁾に纏められている。

3-1-3 ロバート・オルシ

オルシは、LR を提唱した研究者としてよく知られている。オルシは宗教研究における諸問題と宗教現象をどのように捉えるべきかという問いを論じる際に、宗教現象を、信仰や

History of Practice, Princeton University Press.

⁽¹⁴⁾ 「大衆宗教は、公的または学問的なキリスト教と俗悪なまたは異教徒の文化との間に出現した空間を意味するようになったもの」とし、「大衆宗教は実践に対して規範的な視点を押し付けている」と批判している。

⁽¹⁵⁾ アーママンの研究については、ボストン大学のウェブサイトの紹介を参照。

<https://www.bu.edu/sociology/profile/nancy-t-ammerman/>. (最終閲覧 2023/6/17)

⁽¹⁶⁾ Nancy T. Ammerman (ed.) (2006), *Everyday Religion: Observing Modern Religious Lives*, Oxford University Press.

⁽¹⁷⁾ Nancy T. Ammerman (2021), *Studying Lived Religion: Contexts and Practices*, NYU Press. 下記も参照。 <https://www.bu.edu/sociology/profile/nancy-t-ammerman/>. (最終閲覧 2023/6/17)

なお、従来の彼女の研究は、保守的な宗教運動やアメリカの宗教団体とその社会的提供のネットワークに焦点を当てたものだった。

儀礼のみならず、人々の日常生活そのものと文化、歴史、政治と密接に関わるものと捉える。この観点から、宗教は人が作り上げていくものであるとして、実際にどのようにそれが形成され、かつ「変化」していくかという視角から研究することの重要性を論じた。このような視点に立脚することから、宗教現象研究において、過去の理論および研究のみならず、現地での参与を含む観察、個人的な体験や感性による理解を重視した。宗教現象を捉える新たな方法論の中で提示されたオルシのフィールドは現代アメリカであり⁽¹⁸⁾、当地における宗教の多様性と宗教現象が、社会・文化・政治其々の文脈の中でどのように作用するかという点に注目し、特に宗教的な経験を分析して、宗教的实践が人々の日常生活にどのように組み込まれているかという側面が探求されている⁽¹⁹⁾。また、*The Madonna of 115th Street: Faith and Community in Italian Harlem (1880-1950)*⁽²⁰⁾では、20世紀初頭のニューヨーク市イタリア人ハーレムがフィールドとして取り上げられ、当地でのカトリック信仰の实践に焦点が当てられて、宗教と社会的文化的な変化の関係が探求されている。

3-1-4 メレディス・B・マクガイア

マクガイアは米国の宗教社会学者であり、主として宗教とジェンダー、宗教と文化の相互作用、宗教と社会変動、宗教的なアイデンティティ形成等のテーマによる研究が知られている。ジェンダーと宗教に関する研究においては、*Religion: The Social Context* (1996) の中で⁽²¹⁾、「宗教的信念が性差にどのような影響を与えるか」というテーマを巡る考察を行い、宗教と社会変動に関しては「宗教的信念が社会変動に与える影響」について論じている。

これらを含む研究の中でも代表的な著書となったのが *Lived Religion: Faith and Practice in Everyday Life* (2008)⁽²²⁾ である。本書でマクガイアは、宗教が実践される現場における信仰の实践、祈り、儀礼、神秘体験等について調査し、宗教的な实践に参加する人々の人生における宗教の役割について理解を深め、詳述した。その抄録に拠れば⁽²³⁾、善良なカトリック教徒だが、ミサに出ることは稀で、自宅に設置した祭壇（グアダループの聖母像とメキシコの女流画家フリーダ・カーロの画像を混ぜて置き、古典的な癒しのクリスタルがついた伝統的な奉納の蝋燭などを設置）の前で毎日黙想し、地域の宗教行事で料理を作るときに特に霊性を感じるというラテン系アメリカ人女性教師について、彼女の宗教もしくは宗教性をどのように考えればいいのか、という問いが立てられる。その上で、このような多様な宗教的实践が、長い間、現代宗教の研究者を困惑させてきたことに視点が向けられ、

⁽¹⁸⁾ Robert A. Orsi (2005), *Between Heaven and Earth: The Religious Worlds People Make and the Scholars Who Study Them*, Princeton University Press. において論じられている。

⁽¹⁹⁾ Orsi, 前掲書参照。

⁽²⁰⁾ Robert A. Orsi (2010), *The Madonna of 115th Street: Faith and Community in Italian Harlem (1880-1950)*, Yale University Press.

⁽²¹⁾ Meredith McGuire (1996), *Religion: The Social Context*, Wadsworth Pub.co (メレディス・B・マクガイア『宗教社会学—宗教と社会のダイナミックス』山中弘・伊藤雅之・岡本亮輔訳, 明石書店, 2008年)。

⁽²²⁾ 本書については、オックスフォード大学のウェブサイトとその概要および関連研究が紹介されている。<https://academic.oup.com/book/3374>. (最終閲覧 2023/6/17)

⁽²³⁾ 同上抄録を参照。<https://academic.oup.com/book/3374>. (最終閲覧 2023/6/17)

研究者による研究は、個人が制度的に定義された信念と実践のパッケージ全体にコミットする、あるいはコミットすることを拒否するといういわば二項対立の仮定から始まっていると指摘される。社会調査では通常、回答者に自認する宗派やその他の大まかな宗教のカテゴリーについて答えることが求められ、教会への出席や聖書を読むこと、祈りの頻度など、個人が公的な宗教的基準にどれだけ適合しているかによって、社会学者が宗教性を測定しようとしてきたことが指摘された上で、宗教的行動を理解し研究する新しい方法への異なる道筋が示されている。その道筋は、研究者が人々をあらかじめ用意されたパッケージに当てはめようとするのではなく、人々が日常生活の中で実際に生き、経験している宗教を研究するところから始められなければならないと提唱される。そうした視点に基づいて、教会への出席率の低下を西洋世界の宗教の死とみなす人々に異議が唱えられ、見るべき場所さえ知れば、宗教は過去の時代と同様に、広く活気に満ちているのだと論じられている⁽²⁴⁾。

3-2 LRの三つの観点

上記では、LRアプローチをとる代表的研究者について言及した。ここでは、これらを参考にして、LRアプローチの特徴の要約を試みる。

ホールによれば、LRのアプローチは三つの主要な観点に基づく⁽²⁵⁾。一番目の観点は次のようなものである。実践として理解されるLRでは、公式の教義や行動規範と、宗教や教会の信者が実際に行うことの間にしばしば生じる差異を認める。LRアプローチは、聖職者、信徒、専門家、素人を問わず、宗教を構成する要素に関わる規制的、体系的、形式的な構造に対応して、宗教的行為者が適応、抵抗、即興を行うことを当然と見なす。また、これらの相異を非宗教的なものとして排除するのではなく、こうした側面のプロセスを明らかにし、特に公的と非公的な関係が常に相互に折衝し合っている状況を検討することに努める。

二番目の観点は次のようなものである。実践としてのLRは、宗教的行為者がパターン化された方法で行動することを認識する手段である。実践は無作為及び無目的ではなく、私たちが一般的に「儀礼」と呼ぶような構造や形状を帯びている。故に、LRというアプローチでは、宗教的实践のために承認された場所として公的に指定された空間の中で何が起こるかについて、即ち、礼拝や典礼などのあらゆる側面に関心が向けられる。だが、その空間の外側や周縁で起こる儀礼にも同様に関心が向けられる。例えば、教会の夕食会、家族の再会、諸聖人の日、母の日、癒し、贈り物、神社仏閣への参拝や巡礼など、さまざまな機会が挙げられる。特にキャサリン・ベル（Catherine Bell）が *Ritual Theory, Ritual Practice* (1992) で再考した如く、儀礼は「儀式化」の、つまり常にオープンエンドでプロセスの中にあるものとして再構成される⁽²⁶⁾。

⁽²⁴⁾ ここでの抄録の要約は同上以下を参照したもの。 <https://academic.oup.com/book/3374>. (最終閲覧 2023/6/17)

⁽²⁵⁾ D. Hall, *Lived Religion*, Encyclopedia.com. (2019) <https://www.encyclopedia.com/religion/legal-and-political-magazines/lived-religion>. (最終閲覧 2023/6/17)

⁽²⁶⁾ Oxford University Press の書籍紹介ウェブサイト参照。 <https://global.oup.com/academic/prod>

三番目の視点は次のようなものである。LR とは、与えられた実践の中に埋め込まれている意味の枠組みである。オルシの *The Madonna of 115th Street: Faith and Community in Italian Harlem (1880-1950)* (1985) では、シンボルが複数重なり合い、さらには矛盾することの意味が説明され、実践を意味の遊びに結びつける分析様式が例証された上で、実践とは何なのかという問いについて考究される。その答えとして、実践はあらゆる宗教的伝統の中で構成され、人々が宗教的に行動することを選ぶ方法の中に常に存在する緊張、定義に関する進行中の闘争を内包しており、実践はいかなる統合も暫定的なものであることを示唆していると提示される。

これら三つの視点は、現代の宗教を理解する上で極めて重要であるだけでなく、過去に対する新たな理解も得られるものであるという⁽²⁷⁾。後の箇所で言及する LAR ではこれらの視点が古代世界の宗教研究、未だ文字を所有しない時代と地域の宗教を考察する際にも、考古学資料を参照しながら適用される。上述のような LR のアプローチへの理解なくして、LR が古代に適用された LAR のアプローチによる宗教研究を理解することは出来ない。

4 リュプケ *Pantheon*

Pantheon は、エアフルト大学教授（マックス・ウェーバー先端文化社会学研究センター副所長）リュプケによる古代地中海宗教の物語 (*Geschichte der Antiken Religion*)⁽²⁸⁾である。原著は 2016 年、ドイツ語により C.H.BECK から出版され、2018 年に Princeton University Press から英訳が⁽²⁹⁾、同年に Guilio Einaudi editore s.p.a.Torino からイタリア語訳が⁽³⁰⁾出版されている。

uct/ritual-theory-ritual-practice-9780199733620?cc=jp&lang=en&#. また、以下において PDF で本文を読むことが可能。<http://web.vu.lt/rstc/a.pazeraite/files/2014/09/Catherine-Bell-Ritual-Theory-Ritual-Practice-Oxford-University-Press-USA-2009>. 以下では PDF で introduction を読むことが出来る。https://scholarcommons.scu.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1113&context=rel_stud. (いずれも最終閲覧 2023/6/17) なお、本書の邦訳も公刊されている（キャサリン・ベル『儀礼の理論・儀礼の実践』森下三郎・早川敦・木村敏明訳、金港堂、2021 年）。

Catherine Bell は同書で儀礼理論と実践について考察し、儀礼の定義、目的、機能、構造、言語、身体、時間、空間、演出等について理論に基づくアプローチに立脚して、事例を提示しながら分析している。その中で、儀礼を社会的な現象と捉え、儀礼が社会の中でどのような役割を果たし、個人と社会の関係をどのように形成するかという点を検討した。加えて、宗教儀礼のみならず日常的な儀礼や社会的な儀礼を含め、多様な儀礼についても検討している。それらから、儀礼が文化の特徴を表現し、個人や集団のアイデンティティ形成や社会秩序の維持、宗教的・精神的な経験、感情表現、権力構造にどのように関わっているのかも分析している。さらには、儀礼の創造や変容についても論じ、儀礼が社会変化にどのように適応しているのかを探究している。同書は、儀礼に関する総合的な理論上の枠組みを提供し、儀礼が人々の生活や社会に与える影響を深く掘り下げた重要な著作として宗教学及び文化人類学の分野において高く評価されている。

⁽²⁷⁾ D. Hall, *Lived Religion*, Encyclopedia.com (2019) を参照。 <https://www.encyclopedia.com/religion/legal-and-political-magazines/lived-religion>. (最終閲覧 2023/6/17)

⁽²⁸⁾ *Geschichte der Antike Religion* は、*Pantheon* 独語版表紙の副題。原著において、ローマという固有名詞がタイトルに含まれないことが興味深い。

⁽²⁹⁾ 英語版翻訳では、副題は *A New History of Roman Religion* となっている。

⁽³⁰⁾ イタリア語版では、副題は *Una Nuova storia della Religione Romana* となっている。

4-1 *Pantheon* のアプローチ

Pantheon では、LR を古代に応用した LAR アプローチにより、古代地中海地域全域に見られる様々な宗教的伝統を、主としてローマに焦点を当てて統合し、宗教的な儀礼が行われる世界から、人々が宗教に属する世界へと移行する「変化」の物語が描かれる⁽³¹⁾。議論の射程は、空間は地中海世界（横糸）、時代は紀元前 9 世紀から紀元後 4 世紀（縦糸）の凡そ 1000 年に及ぶ。この時間的地理的空間の中で、個人の経験や実践がどのように宗教を公的な形とは異なるものに「変えていったのか」という視点が強調される。その上で、広範な空間における長期に及ぶ時代背景の暫時的な変化により、当該時代の当地で LAR がいかに形成されていったのかということが明らかにされる。

本書では、宗教はそれ自体で領域を構成するものではなく、政治、社会、経済、文化の発展との関連で常に位置づけられる必要があるとして、射程範囲内の諸宗教の様々な特徴が採り上げられ、それらに光を当てながら「神殿」や「祭壇」といった従来の研究で中心を占めてきた概念以外の要素、及び宗教的实践における男性と女性の役割に関する新たな見解も提示される⁽³²⁾。これらの内容から、本書が先に確認してきた LR アプローチが当該空間に適用された著書であることがよくわかる。

4-2 *Pantheon* 原著と翻訳及び講評から

本書については複数のブックレビューや書籍紹介が公にされており、ウェブ上でも読むことができる。その多くは英訳版に依拠したものである。このことから、現在では本書は英訳による読者が多いことが伺われる。

本書は、LR アプローチに基づいて、内容が極めて広範囲に渡り、考古学資料、碑文を含む膨大な資料が個々のエピソードや考察および概説を伴って結ばれるという性質から、専門家にとっても初心者にとっても、また原著によっても英訳版によっても、いずれも読み易いとはいえない書籍となっている。英語版に依拠した多くのブックレビューにおいても、原著及び翻訳の読み難さに言及したのが見られる。内容の理解し難さを予め考慮してか、英語版はいくつかの箇所において、原著の内容が訳者によって捉え直され、時に内容が付加され、あるいは訳し下された文となっている⁽³³⁾。

但し、本書の読み難さの根本は、LR の方法論を古代に応用して、1000 年以上に及ぶ古代地中海世界の宗教を描写したという性質に由来すると考えられる。既に言及した通り、

⁽³¹⁾ Jörg Rüpke, *Pantheon* C. H. Beck (2016), 第 1 章参照。

⁽³²⁾ <https://www.amazon.com/Pantheon-nuova-storia-religione-romana/dp/8806235966>. (最終閲覧 2023/6/17)

⁽³³⁾ このことから、原著と英訳とを比較すると、複数の箇所において英訳は直訳とは相当に異なっており、ドイツ語にない文が加えられている箇所もある。筆者が著者に直接に伺ったところでは、著者は、*Pantheon* の内容が其々の文化と言語の読者によりよく伝わることを最重視しており、これらの原文-翻訳の相違は各々の背景を持つ読者を考慮したことから生じたもので、原著がよいともどの翻訳がよいとも言えないとのことだった。また、必要とあれば、例えばドイツ語で読んだ読者に英訳との違いについて説明する必要はあるだろうとのことだった。

本書は青銅器時代後期からローマ帝国時代及び古代後期まで 1000 年以上に及ぶ古代ローマと地中海宗教の歴史を、包括的かつ独創的に叙述したものである。LR アプローチを適用して、ローマに焦点を当てながらも、ユダヤ教やキリスト教を含む地中海世界に見られる多くの宗教的伝統を結び合わせ、個人の経験や実践が、宗教を公式の形とは異なるものに変えていく流れを変化として強調する。このことから、ローマ宗教とユダヤ教、キリスト教、イスラーム、さらには現代の宗教概念そのものに影響を与えた西洋宗教の重要な時期について、ローマを中心とした古代地中海世界を基本軸としながらも、時代と地域共に縦横無尽に往復して新たな像が結ばれる。加えて、ところどころに LR 以外の専門的な方法論も適用される。

著者の元来の専門領域が古代ローマ及び古典学であることから、本著を古代ローマ宗教史として読み始めると、その構成と内容に恐らく読者は当惑する。理由の一つとして、本書ではローマ宗教史の研究史が記されない点が挙げられることもある。しかし、その趣旨は、複数のレビュー及び論考の中で驚きをもって捉えられつつも適切に理解されていると考えられる⁽³⁴⁾。

本書は、古代地中海世界においてローマの宗教がどのようなところから始まり、発展してきたのかということを描出しており⁽³⁵⁾、その流れを、ローマ史研究者のみならず広く宗教に関心を持つ読者が知りながら、日常生活というパラダイムの中で宗教を再考するにあたっての指南書ともなっていると考えられる。本書では、先に言及した「ローマ宗教の研究史」に限らず「宗教」や「歴史」についても、既成の議論を出発点とすることはない⁽³⁶⁾。むしろ、現代という特定の時代の特定の地域に生活する我々が、LAR アプローチの中で「宗教」や「歴史」をどのように捉え直すことができるのかという問題意識が一貫して提示されているのである。その一方で、本書では古代宗教を「近代化」することなく、「パンテオン」の全体像を明らかにすることに細心の注意が払われている⁽³⁷⁾。アミット・ガヴァリヤフ (Amit Gvaryahu) は、本書を読むと森の中を歩いているような興奮を覚えるとした上で、森の中の低木や高木、様々な木々が其々に「道標」となるとも述べている⁽³⁸⁾。本書で扱われる膨大な考古学的資料、碑文、文献は、それら個々の専門家にとっては必ずしも目新しいものではなく、その大半について既に検討がなされてきたものだが、そのマッピングは斬新であり、本書は LR のアプローチを、古代ローマを中心とする古代地中海世界の LAR として適用したという既述の観点も踏まえて、従来のローマ宗教史研究の流れに位

⁽³⁴⁾ Lichard Last によるレビュー (<https://muse.jhu.edu/article/742844>. (最終閲覧 2023/6/17)), 松村一男 (2022)「古代地中海世界の宗教研究をめぐる動向：リュプケ『パンテオン』を中心に」『和光大学表現学部紀要 22』においてもこの点について言及されている。

⁽³⁵⁾ Amit Gvaryahu (2019)によるブックレビューも参照。 <https://www.ancientjewreview.com/read/2019/9/9/book-note-pantheon-by-jrg-rupke>. (最終閲覧 2023/6/17)

⁽³⁶⁾ Steve Donoghue (2018)は、宗教に関連して *Pantheon* は、たとえばキケロの『神々の誕生について』から出発して物質的な世界に働きかけるのではなく、それ自体を歴史的な成果物として読み解いていると指摘している。 <https://openlettersreview.com/posts/pantheon-a-new-history-of-roman-religion-by-jrg-rpke>. (最終閲覧 2023/6/17)

⁽³⁷⁾ <https://www.goodreads.com/book/show/34928232-pantheon>. (最終閲覧 2023/6/17)

⁽³⁸⁾ Gvaryahu (2019)前掲のブックレビュー参照。

置づけるならば、記念碑的な書であるといえるだろう。複数のレビューおよび論考が指摘するように、文献リストの数は膨大で 1000 を超え、これらの文献を「道標」として参照することにより、読者は宗教を巡る更なる知見と考察へと導かれる。この意味においては、本書は古代ローマを中心とする地中海宗教史の稀有なる「入門書」としても多くの人々に開かれていると思われる。

4-3 *Pantheon* の趣旨と構造

本書全体の構造と内容については、前述の如く英語版に依拠したいくつものブックレビューおよび論考に紹介されているので、ここでは本稿の以下の箇所ですべての内容の前提として、最も基本的な構図について簡潔に言及する⁽³⁹⁾。

本書は、第 1 章で本書を貫く根本的な問題提起と方法論の概要が述べられ、第 8 章で本書のアプローチの主軸である LAR を 1-2 世紀のローマ世界の宗教史に当てはめることの革新性が提示された上で、エピローグを兼ねる第 13 章において本書で企図された主張の全様が明示される。この他の章では、第 2 章では紀元前 9-7 世紀、第 3 章では紀元前 7-5 世紀、第 4 章では紀元前 6-3 世紀、第 5 章では紀元前 5-1 世紀、第 6 章で紀元前 3-1 世紀、第 7 章で紀元前 1 世紀-紀元 1 世紀、第 8 章で紀元 1-2 世紀、第 9 章で再び紀元前 1 世紀-紀元 2 世紀、第 10 章で紀元 1-3 世紀、第 11 章でも紀元 1-3 世紀、第 12 章では紀元 3-4 世紀という時空間の枠組みにおいて、順次、メディア革命、宗教施設、宗教的实践、アクターによる宗教的实践の形成、宗教説話と文書、アウグストゥス時代における宗教の二重化、そして、紀元 1-2 世紀の生きられた宗教、新たな神々、専門家と提供者、社会集団、社会集団の区別と形成、等のテーマが描出される。

ローマ史研究者が上記の全体的な構成から本書の概要を考察するにあたっては、言及したレビュー等を参照する限りにおいては、現在までのところ LAR の方法論の適用を踏まえていても、時代的には古代ローマに関する文字資料が残存する紀元前 3 世紀以降紀元後 4 世紀までの宗教史の流れに焦点を当てているという印象がある。このことから、本稿では以降において、これまで焦点が当てられることが少なかった *Pantheon* 前半部分の流れ、即ち、ローマ史において残存する文字資料はおろか伝承資料さえも存在しない時代の宗教史描写に焦点を当て、なかでも特に 1-2 章を中心に採り上げて、LAR アプローチに基づく、古代ローマを中心とする古代地中海世界の宗教研究の視角について再考することとしたい。

5 *Pantheon* 1-2 章における視点から

5-1 古代地中海世界の「宗教」を巡って⁽⁴⁰⁾

Pantheon が射程とする地理的空間について、リュプケは第 1 章で、異なる発展を遂げた多くの地理上の場所から成るとし、当地の宗教を LAR アプローチに拠り研究する際には、「地中海」の歴史のみならず他の場所にも視線を投じ、その場所で何が起こったのか、何処でアイディア、モノ、人々が、浸透していったのか問われねばならないとする。但し、

⁽³⁹⁾ 筆者の基本的理解は原著による。

⁽⁴⁰⁾ 本項の内容は Rüpke, *Pantheon*, C. H. Beck (2016) 原著第 1 章に基づく。

それは私達の「想像」の中である。私達はその場所と時間に自らを置くことはできないのだから、確かにそれはあくまで「想像」の中であるということになる。この点については、ローマ宗教史研究者に限らず宗教研究者が当惑もしくは葛藤に直面することになるのではないかと考えられる。

リュプケはまた、当地の宗教について「起源」を語ることは的外れとする。何故なら、当地の多神教と物語世界は、中東、エジプト及びこれら二つの影響を受けた国々で発展したのであり、後のユダヤ教からキリスト教の当地における流れを視野に含めたとしても、それらはエルサレムに起源を持つからである。その上でリュプケは、ローマ史を紡ぐ糸はそもそも、イタリアさらには地中海の端から次第に立ち現れ、西アジアや古代オリエント地域で相互に共演し合う神々とそのヒエラルキーという「パンテオン」のイメージが出現して、それがギリシア・ローマの神概念の形成と人格化、ひいてはキリスト教に採り入れられていく中で重要な役割を演じるものとなっていったのだという流れの全貌に視点を向けていく。この歴史的な推移の中で、当地の宗教的概念、シンボル、行為、文化的な慣習が、多くの側面で共通する要素を持ちつつドラスティックな「発展」言い換えれば「変化」を遂げたという点が指摘される。

5-2 「宗教」を巡る序説と LAR⁽⁴¹⁾

Pantheon 第1章冒頭ではまた、「宗教」を語るに際して事前理解が曖昧なままでは済まされないという指摘と共に、徹底して宗教を見る眼差しの修正が促される。

リュプケによれば、一般に人は宗教について複数の諸宗教から思い描くと捉えられる。また、諸宗教は、宗教的实践、概念と諸制度、場合により組織の支配下にある伝統として理解されると指摘され、宗教研究に際して研究者が「宗教」をどのように理解するかという前提の再考が求められる。宗教研究では、ある地域に共に居住する人々から成るグループの産物である「社会の産物」に焦点が当てられるべきであり、これらの産物は、宗教的なシンボルという形で、共に居住する際の共通の指針の核となるものが日常的な議論の中から引き出されたものであると指摘される。具体的には儀礼遂行に際して生成される記号体系、絵画、物語、成文テキスト、精緻な教えによる世界の解明、或いは倫理的な至上命令の下での行動規定、時に効果的な制裁制度の使用と不使用などだと例示される。

他方、上述のような宗教観は、多くの事柄を説明し得るが、宗教的多元主義、特に相異なる逆説的な表象や習慣の恒常的な共存及び個々人が宗教に対処する方法が極めて異なることも説明されるべきであると考えらるなら、宗教研究は限界に直面するとも指摘される。このような限界は、「西洋的」特にキリスト教的な宗教概念に沿った狭義の定位に由来するものである。今日多くの地域で顕著な伝統的な結びつきの解消が、宗教的個人主義、宗教が目に見え難くなったこと、或いは個々人のスピリチュアリティによって生じた集団的な宗教の変容と理解されてきた点についても、かつての社会と宗教は高度な集団主義を特徴としていたという仮説と結びついたものである。現代についてさえ疑義が提起される仮説は、過去に関しても同様に歪められたイメージを生じさせると警鐘が鳴らされる。

⁽⁴¹⁾ 本項の内容は、Rüpke, *Pantheon* 原著第1章に基づく。

これらへの反省から、改めて宗教の社会的文脈や個々人にとっての意味の変化を正確に記述し得るような宗教概念が必要となると指摘された上で、それは個人とその社会的統合という視点から考えることによって与えられるのだと提示される。LAR は、様々な状況と社会的構造の中に始点を生成するものであり、個々人が他者と相互の間で行う営みが、まれにネットワークや組織へと凝縮されていったり、成文テキストに留められて、それらが私達が一般に宗教と理解するものに相当する大規模で長期に渡る固有の存在となることがあるのだと要約される。

ならば、本書が対象とする古代地中海空間についても、宗教を自明のものと考えず、宗教のダイナミズムとそこから立ち現れる宗教的行為の文化的・社会的文脈における変化についての知見を獲得する必要があると指摘される。つまり、研究者は自らの宗教観に適合するものを捉えるだけでなく、自らの宗教観とは異なるもの、そこから逸脱するもの、その時代の宗教的实践の中では驚きを禁じ得ないものなどを排除しないような、宗教を把握する際の広い境界線を探さねばならないのだと主張される。

これらの視点を経て、さらにリュプケは宗教を、神としてか、神々としてか、悪魔としてか、天使としてか、死者としてか、不死のものとしてかに拘わらず、ある点で秀でたアクターが状況に応じて関与するものとして明確化する。しかし、この場合ある点で秀でたアクターの臨在、関与、個々の状況に対する重要性は、単に疑うべくもないものとしてあるものではないという視点も重視される。アクターは、その場に参与する他の人間からは目に見えない、沈黙している、機能していない、或いは存在していないかもしれない、全く存在していない等とみなされるかもしれない。しかし、ある状況の中で少なくとも一人の個人が、単なる言及にすぎないにせよ、直接呼び出すにせよ、他の人々とのコミュニケーションの中にそういったアクターを介入させる時、その場所で行われるものが宗教的行為とみなされるのだと説明が加えられる。このような宗教の捉え方は、大いに議論を呼ぶ可能性もあるだろうが、視点の提起として極めて興味深いといえるだろう。

古代地中海の宗教についていえば、宗教的コミュニケーションや宗教的行為の実践によって、日常的な事柄のみならず非日常的な問題に対処する個々人の行動や権威、創造性がどのように強化されたのか、そして疑いの余地なくもっともらしい行為者たるアクターへの言及が集団のアイデンティティ形成にどのように貢献したのかという点を検討することが必要であると指摘される。また、こうした宗教的コミュニケーション行為が、個々人を全く異なる形と強さを持つ社会的存在である一つのグループの一員として行動させたり考えさせたりしたという側面、およびその行動と思考に関わる戦略、つまり超越的なアクターである神々とうまく関わるための戦略について考察することが求められる⁽⁴²⁾。

リュプケはさらに続ける。しかし、現在生きている人の「心の内」を知ることすら不可能だとすれば、はるか 2000 年以上時を隔てた古代の人々の日常生活や過去のコミュニケーションの形跡を、その「心の内」を含めて理解することはなおのこと困難である。故に、

⁽⁴²⁾ 誰も話題にしたり語りかけたりすることのない神には何の力もなく、名前も儀礼もなく、碑文も宗教的建造物もなく、目に見える表象も名だたる聖職者もない場合、そこでは宗教は生起しないか、宗教的な行為は急速に変化していくからであると説明される。

古代地中海世界の人々による宗教活動の戦略が、他の人々との絶え間ない協力の下でどのように発展し得たのかという点について、少なくともモデルとなる想見を「現像する」ことがより重要とされる。私見に拠れば、この点は、19 世紀以降に成立した宗教学としての宗教研究が、科学的方法論に則して、主観に傾かず可能な限り客観的に行われるべきであるという前提に立脚してきたことを意識するなら、極めて斬新である。LR とは異なり、古代を対象とする LAR アプローチには、この点についてさらなる議論の余地があると再考されるであろう。「想像」による LAR アプローチについては、第 2 章の記述に基づいて次項でも言及する。

いずれにせよ、詳細に検討されるべきは、宗教的な行動力、宗教的アイデンティティ、宗教的コミュニケーション技術とメディアの発展、という 3 つの側面である。宗教は初めはアクターをめぐる経験と行動から生じ、同時にその経験を通して生成されたものの中で絶えず変化していく。宗教を静謐たるものとみなし、儀礼体系、神々のパンテオン、信仰体系として固定化しようとする試みから、宗教自体は再三逃れてきたのだとリュプケは指摘している。

以上の論旨によって、宗教を捉える視角と LAR というアプローチの関連が明らかにされる。

5-3 LAR のアプローチと「科学」としての宗教史⁽⁴³⁾

古代地中海世界の人々による宗教活動の戦略とそれが他の人々との絶え間ない協力の下でどのように発展し得たのかという点について、LAR アプローチにおいて、想像をも用いて現像していくのだとすれば、近代科学として成立した宗教学の方法論とどのように折り合いがつけられるのだろうか。この点について、宗教行動を理解する方法論として、*Pantheon* 第 1 章では、理解社会学及び文化学といった学科の援用にも言及される。それは、行為は何をおいても問題解決行動として必要とされるものだという視点の応用であると考えられる。

つまり、個人は常に新しい状況に直面しており、状況そのものに対処する過程で人の行動の目標と行動の意味が発展する。行動する人は常に社会的な文脈に組み込まれており、伝統の中に立つ。この具体的で可変的な空間では、行為者の行為そのものの中で行動力と行動範囲が切り拓かれる。変化する歴史的状況から生じる諸問題を引き受けて、人は慣習、想像力、判断力の相互作用を通してこれらの構造を創造し、また変化させる。人と人との間に常に新たに繰り返されるこの相互作用こそが、構造や伝統を生み出し、次の行動を形成した制限する。これらの行動はさらに構造や伝統を変え、それらに疑問を投じる。集団が決して固定化されたものではないという認識も重要である。こういった視点から状況を観察すべきことが勧められる。

しかし、「宗教」を示すものが、たった一つの彫像や花瓶の破片、犬の骨やある建物の柱穴など、僅かな考古学的痕跡に限られている古代空間の場合には、これらの集団やコミュニティを再現することに勿論注意が払われねばならないことも指摘される。それは、単

⁽⁴³⁾ 本項も Rüpke, *Pantheon* 原著第 1 章に基づく。

に家々の物理的な近さや、同じ習慣、同じ言語或いは類似する奉納品や神々からは再現されない。コミュニティや共有された記憶だと考えられるものは、常に個人の考えからも生じ得るからである。

上述の観点に立ちながら、リュプケは、古代宗教史は、安定した「部族宗教」が可動性を備えた「世界宗教」にとって代わられたというような単純なものではないと改めて明言する。これらの言説の中に従来の古代地中海宗教史研究への修正的視点が見られ、あえてLARアプローチが適用される理由が伺われる。

5-4 鉄器時代（紀元前9世紀）から辿るローマを中心とする古代地中海宗教史⁽⁴⁴⁾

LARは、*Pantheon*において鉄器時代の古代地中海世界から始められる。ローマ史の始点として、文字資料が残存する紀元前3世紀以降、ローマ建国元年として共有され伝承資料が残された紀元前753年以降、或いは考古学資料が僅かに残存する鉄器時代紀元前9世紀以降、の三者択一の中で、始点が鉄器時代に置かれることは、ローマ史研究において一般的ではなく、むしろ少数派に属するといえる。所謂証拠資料に基づく科学的な宗教史研究を念頭に置かならば、文字資料が残されていない時代である鉄器時代の宗教史を扱うことは相当に危険が伴うとも考え得る。

しかし、*Pantheon*では、考古学資料に拠りつつ、その理解が「想像」によって補足され深められていくところにも特徴がある。そのようなアプローチが明示されるのが、複数のブックレビューによっても詳細に言及されることがない*Pantheon*第2章である。

上記に鑑みて、本稿では最後に第2章に言及することによって、古代地中海世界に適用されたLARの特徴とそこから浮かび上がる視点についてさらに述べていくこととする。

5-5 *Pantheon* 第2章鉄器時代へのLARアプローチから浮かび上がる視点⁽⁴⁵⁾

Pantheon 第2章冒頭でリュプケは、紀元前2千年から1千年期への転換期のイタリア中部に関する考古学研究への眼差しから描写を始める。ここで、祭壇も彫像も犠牲坑もなければ未だ文字もない同時代に生きる20代半ばの一人の架空の女性の生活とその心の内や思考を想像するのだ。その女性を「レア（Rhea）」と名付けてみようとして第2章は始まる。この「レア」と名付けられた鉄器時代の架空の女性は⁽⁴⁶⁾、*Pantheon* 第13章エピローグの最後の文で、鉄器時代に生きた彼女はこの地中海世界の宗教的な変化を想像してはいなかっただろうとして想起される⁽⁴⁷⁾。

5-6 宗教の始まりとしての「特別なもの」「日常を超えたもの」⁽⁴⁸⁾

先に言及した「宗教」を捉える眼差しとして、第2章においてリュプケは、「宗教」についてではなく「レアが驚いたこと」や「日常を超えたもの」即ち彼女にとって「特別」と

⁽⁴⁴⁾ 本項は Rüpke, *Pantheon* 原著第2章に基づく。

⁽⁴⁵⁾ 本項は Rüpke, *Pantheon* 原著第2章に基づく。

⁽⁴⁶⁾ この女性がレアと名付けられた理由についても読者は様々に想像することとなる。

⁽⁴⁷⁾ ここでは、原著および英訳の意を汲んで、直訳ではなく同上の表現とした。

⁽⁴⁸⁾ 本項は Rüpke, *Pantheon* 原著第2章に基づく。

感じられたものについて想像を巡らしていく。例えばそれは「機織り機」や木製あるいは陶製の食器や家事に要する道具、種蒔きや収穫、移牧、自然災害などであると推測され、岩や洞窟や質素な家屋なども挙げられる。「神」と認識され、名づけられるような対象は未だ存在しない鉄器時代においても、人が生活する素朴な日常生活の営みの中に「自らの力だけでは上手くいかないことがある」という認識があり、それに対して「たとえ姿が見えなくとも、その助けや少なくとも善意が重要で決定的であるような名をもつ他者がいる」と語る人が存在し始め、さらにはそういった人物が、「いざという時に人間を援助したり守ったりしてくれる存在に出会うことが出来る場所がある」と主張し始め、加えて「その場所は洞窟や耕作地の端の臭気を放つ泉だ」と述べていたのだろうと「想像」が重ねられていく。こういった場所から、鉄器時代の考古学的な埋納品が出土しているという視点をもって、このようなイマジネーションに基づく推定が行われるのだ。

私見に拠れば、このアプローチは極めて印象的な一方で科学的とはいえないが、他方で、「哲学は驚きから始まる」としたプラトン、アリストテレス、デカルト等の言説⁽⁴⁹⁾を想起するとその妥当性は理解され得るといえる。また、日常的に存在し生じるものの中で驚きを味わい、探求することから哲学が始まると認識され共有されてきたのだとすれば、「宗教」に関しても、そうした発想は必ずしも突飛とは断言されないだろう。但し、ここでは新たな問いも提起され得る。では哲学と宗教の違いはどのようなところにあるのかという視点からの問いである。この点に関しては *Pantheon* の以降の箇所における LAR アプローチによる描出からある程度の解が得られるといえるのだが、最も基本的な視点を挙げれば、「宗教」はあらゆる人々の営みの中で行動を伴って表現され体感され、強化されるという要素を備えているものと答えることが可能となるであろう。そもそも人の知覚とは、外界からの刺激を感じ取り、それに基づいて行動する人間が、感じた外界の刺激に意味付けをする過程を言う⁽⁵⁰⁾。そして宗教は、身体を持つ人間が日常生活の中で絶えず生活環境からの刺激を受けて生きる中での反応に起点を持ち、その反応が五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）を通して感じられ、強化されていく装置の集合体とも捉えられ得るのではないだろうか。

5-7 考古学上の発見の解釈に基づく「宗教」と埋納⁽⁵¹⁾

Pantheon 第 2 章の続く箇所では「埋納」が採り上げられ、埋納をめぐる解釈が重ねられていく。神の像も神殿も神官も不在の文化状況の鉄器時代については、日常生活の個々の局面の復元は考古学上の資料に拠るものに留まる。であればそこから、通常の食べる、捨てる、留めるといったこととは異なる、強化されたもしくは制度化された「宗教的行為」

⁽⁴⁹⁾ ここでは、九鬼周造（2011/2016）『偶然と驚きの哲学——九鬼哲学入門文選』書肆心水書店他参照。

⁽⁵⁰⁾ 嶋田博行（1999/2016）『知覚心理学辞典』有斐閣、572b-573b ページ；山蔦圭輔（2010/2018）『心理学・臨床心理学概論』第三版、北樹出版、19-29 ページ他参照。

⁽⁵¹⁾ 本項は Rüpke, *Pantheon* 原著第 2 章の内容に基づく。ここでは、2022 年宗教学会第 81 回学術大会での個人発表「古代地中海世界における宗教を巡る検討—日常生活を軸として」（口頭）の内容の一部を本稿の主題に繋げた。

が把握されると指摘される。しかし、それらのうちの何が宗教とみなされるのかという問いも同時に提示される。

古典的見地からは、紛うかたない宗教現象は、埋納と埋納物から辿ることが可能な「犠牲」を超えるものではないといえる。しかし、後者は考古学上の技術と保存の観点からごく一部であり、建築遺構によって動物の骨が発見された状況が予め「宗教的」なものであると示されていない場合には動物犠牲の特定は困難であり、その場所が祭祀の行われる場所として予め知られていなければ、水や穴に沈められた犠牲や奉納品が、宗教との関わりで新たに見いだされることは殆どない。故に、鉄器時代初期から紀元前 10 世紀頃までは、洞窟や泉、水路、立水などの堆積物が、考古学上の発見を占めているのだが、これは逆説的に、考古学上の埋納物を宗教的な行動に関連付けて捉える視点があれば、これらから同時代の「宗教」についてさらに知ることが出来るということを意味するとリュプケは指摘する⁽⁵²⁾。この見方には LAR の更なる可能性があるといえるだろう。

例えば、サルデニアでは、後期青銅器時代に形成されたヌゲーラ文化との大きな連続性が保たれ、個人或いは集団儀礼を通じて壁の裂け目に小さなブロンズ像が幾度も挿入されたことが知られる。その姿形とそれによって暗示される場面は、参加者に彼らが幾度も聴いてきた説話や歴史を想起させたであろうのみならず、フィギュアの可視的な部分を見ることを通して、それらが再三追想されたことも推察される。つまり、このような手段を通して共通の物語世界が保証され、状況的で個別的なモチーフが折に触れて用いられることによって、やがて「永遠に」使われることを前提に設計された建造物とその場所が、常に新たに利用され、所有されるようになっていったと考えられるというのだ。

LAR アプローチでは、部分的にミニチュア化された形のものが主である考古学的埋納品の中に日常生活に用いられるミニチュアが多く出土することから、これらが日常生活の中で特別とみなされたものに関連しており、さらには宗教と関わるものであった可能性があるとして考察が重ねられていくのである。

5-8 埋納と埋葬及び死と宗教⁽⁵³⁾

鉄器時代からの埋納品と宗教との関連性が考慮されたところで、改めて人の死と埋葬及び宗教の関連性が考慮される。紀元前 12 世紀頃以降、火葬が広く行われるようになり、考古学上の資料から、異なる大きさの陵と異なる量と質の副葬品と結びついていくことが知られている。

リュプケによれば、埋葬は宗教を認識する視点の中で最古の慣習に属するものであるとされるが、これに異論はないであろう。また、埋葬は狭い地理的・時間的空間の中で、千変万化に急速に「変化」していることが認められるという。イタリアにおいて人々は紀元前 12 世紀頃から火葬と骨壺による埋葬を北方から取り入れ、家族のために密接に隣接した墓所をしつらえた埋葬を体系化し、居住区域として調整していたことが知られる。幾つかの

⁽⁵²⁾ 逆に、考古学者や歴史学者にも新たな知見が拓かれるとリュプケは指摘する。

⁽⁵³⁾ 本項は Rüpke, *Pantheon* 原著第 2 章に基づく。ここでは、2022 年宗教学会第 81 回学術大会での個人発表「古代地中海世界における宗教を巡る検討—日常生活を軸として」（口頭）の内容の一部をさらに深めた。

集落では、小さな子供を長期間家の近くに埋葬していたことも知られる。集落住民にとって、仲間をどこに葬るかということは無関心な問題ではなかった。彼らは通い易い近い場所に死者のための空間である埋葬地を作り、死者と生者が作る共同体空間のようなものについて語っていたと思われるとリュプケは考察を進めていく。

儀礼としての埋葬は時代を超えて普遍的な習慣である。死者を「配慮すること」或いは死者が「死後も生き続ける」という想念は個々人が関心を抱いてきたものだったかもしれない。しかし、LAR においてより探求されるべきなのは、人々の死後の世界に対する想いではなく、死と埋葬を巡る状況の中に存在しているアクター、つまり生者の行為とアイデンティティ及びコミュニケーションに関連する事柄であるとリュプケは指摘している。そうして、日常生活の中の現実的で重要な側面に我々の視点を移動させるのである。

ここで、人の死を巡る主要かつ深刻な問題は、鉄器時代のような古代においても、恐らくは現在の人々が直面するものと共通するのではないかという視点が開示されているように思われる。即ち、社会的な生活、関係性の再構築に関わる問題である。死者が小さな家族集団の内部組織とその外部との関係にとって中心的存在であればあるほどこの問題は深刻だったとリュプケは指摘している。幼子や高齢の両親等の家族の死は、感情的には極めて深い悲しみを伴うものかもしれないが、社会生活の維持における人間関係上の重要性という観点からすれば、小さな集団を治める母親や父親の死の方がより重要だったかもしれないとリュプケは推測するのである。後者の死は、女性が未亡人に、親がシングルに或いは子供が孤児に、息子が家長になるという社会的な変化を伴うものだったと考えられる。大きな集落の集団の中では、威信や影響力、財産や収入の分け前を失うという重大な脅威が存在したことも押し測られる。そういった局面において、死者との継続する関係性を尤もらしいものとする事ができるならば、即ち死者が存在し続けると示すことが出来るなら、場合によっては遺族が日常生活を社会の中でこれまでと同様に維持するに際して直面する諸問題や危機を回避することが出来たかもしれないと推し測って想像されているのだ。このような事情からも死者との密接なコミュニケーション行為が生じ、そこに仲介者である人間のアクターが関与して、死者の評判、権威、財産を主張し、生者との関係性の継続を主張し、さらには死者とのコミュニケーションの親密なパートナーである自身の地位と権威を築くという可能性が開かれたという側面をリュプケは指摘している。

上記のような事情の中で行われる行為は、あるときは身体の埋葬として、ある時は焼却として、またある時は骨壺への回収或いは火葬炉の薪や遺体焼却の残骸の埋蔵として、不確かで常に疑わしい考え方に拠りつつも、儀礼として成立していった。そしてこの段階から、最早疑いようのない仲介者である人物としてのアクターたちとのコミュニケーションが、「神々」とのコミュニケーションと同じような形で行われるようになったのだとリュプケは描出している。

5-9 神々・画・宴会・聖域の成立と発展⁽⁵⁴⁾

前述のような諸局面から始まっていく、日常生活における宗教的な行為は、やがて、

⁽⁵⁴⁾ 本項は Rüpke, *Pantheon* 原著第 2-6 章に基づく。

神々・画・宴会・聖域などの形成へと展開をみ、発展を続ける。*Pantheon* では、その過程が、2 章後半以降から 13 章まで、個々の時代と地域の事例と共に詳述されていく。紙幅の都合上からも、本稿ではこれ以上個々についての言及を行うことが叶わないが、筆者の視点から、以下に二つの点を指摘しておきたい。

一つめは、これらの展開と発展がみな、人々の日常生活の現実的な諸場面から生じているということである。例えば、リュプケが記している様に、宴会は、人々の食事がやがて儀礼と結ばれ、日常生活の喜怒哀楽と様々な機会のコミュニケーションの中で、また社会的な威信の中で発展していったものとみなされる。埋納品に見られる食器類もこうした宴会の場と関連している可能性が大いに考えられると推定されている。上述のように、宗教的行為はみな日常生活の中の特別なもの、強化されたものを契機として始まり、そこから生活の延長線上に発展していったのだという視点を、宗教研究の中で私達は見失ってはならないといえるだろう。

もう一つは、これらの宗教的行為の形成と発展過程で、徐々に人の五感の全ての側面を網羅する要素が独創的に備えられていったということである。即ち、宗教は目で見ること（視覚）、耳で聴くこと（聴覚）、手や身体で触れること（触覚）、口で味わうこと（味覚）、香りとして感じられること（嗅覚）といった要素をみな実装していったのだ。筆者から見れば、この帰結には大きな意味があると見積もることが出来る。というのも、人はそれぞれ上記の五感を備えているが、現代の神経生理学上の知見が明らかにしているように、全ての人においてそれらの五感が同じように機能しているとは限らない。ある人は、視覚から得た情報を捉えるのが得意で、ある人は聴覚から得た情報を捉えるのが得意であり、また別のある人は、いずれも得意であったり苦手であったりするというように、個人内でも個人間でもそれぞれの感覚知覚にはしばしばバラツキがある。勿論、年齢や発達特性、さらには教育や文化の影響によっても、これらの感覚知覚は影響を受けるだろう。仮に宗教が、知覚の一側面に繋がる要素のみしか備えていなかったならば、宗教は当該の知覚の働きが得意な人にはよく共有され得るが、別の知覚が得意な人には共有され難いだろう。しかし、宗教が人の知覚の各側面に働きかける要素を一通りみな備えていれば、いずれかの知覚の経路からあらゆる人が宗教行動に繋がることが出来ると考えられる。人の知覚はやがて前頭葉において統合され、そのものを判断したり解釈して意味付けたり価値評価する認知へと繋がっていく。認知は物事の意味や価値を生成し、再構成し、変化させる。宗教は人の認知活動と共に、生成し、変化を続けてきたともみなされるのではないだろうか。

上述のように、宗教的な実践は遅くとも、*Pantheon* 第 6 章が描写する紀元前 1 世紀までに、人の認知に繋がる知覚上の要素をすべて実装し、ついには儀礼を文字に記すまでに至った。このような展開を辿った宗教の発展と変化の軌跡を、*Pantheon* は、ローマを中心とする古代地中海世界をパラダイムとして、LAR のアプローチによって、根気強くかつ大胆に描いていると捉えられる。

6 結び

以上みてきたように、LR を応用した LAR は、日常生活における個人の経験に焦点を当

て、それらを解釈するアプローチである。ホールが指摘したように、LR は流動的、移動可能かつ不完全な構造を持つ「不完全なツール」でもある。このツールを古代地中海世界というパラダイムに応用した LAR は、とりわけ、証拠に立脚した科学的な手続きという観点からいえば、不完全なものといえるかもしれない。しかし、「科学的」とはどのような内容や手続きを意味するのかということを、個々人の日常生活における宗教行動の実際に則して、より具体的に再考する必要があるのではないだろうか。例えば、行動そのものの誘因となった背景や当該行動の機能、行動を行う人々の内面や行動から生じた帰結としての状況と内面の変化について、どのような手法でどの程度まで調査し、考察を深めることが「科学的」なのか、他分野における現代の「科学的」アプローチの方法論も参照しながら追考することが望まれるだろう。

LAR には、オルシが重視した「参与を含む観察」や「個人的な体験」というツールを用いることが出来ないところにも弱みがある。他方、「感性による理解」については、対象世界が古代であっても、*Pantheon* 第 2 章において試みられたように、不可能ではないことも示された。そもそも、同じ時代に生きていても、人は想像力や共感なくしては他者を理解し得ないのだとすれば、LR のアプローチを用いて現代の生きられた宗教を理解することと、LAR のアプローチを用いて、古代地中海世界の人々によって生きられた宗教を理解することとの間には、方法論上の大きな乖離はないと考えることも可能かもしれない。別の視点からすれば、LR における「参与を含む観察」や「個人的な体験」というアプローチの中で、「想像」や「共感」を含む研究者の内面が、どの程度研究結果に影響を与えているのか、ということも問われるだろう。さらに「想像」や「共感」について言えば、例えば体験記のような文字資料が存在する場合、それらに記された内容から、研究者は対象の内面をどの程度まで把握し得るのか、そこに「想像」や「共感」という要素はどの程度介在しているのかという点も再考されるべきだろう。

オルシが述べた「宗教と社会的文化的な変化の関係」については、長期におよぶ歴史を網羅することが可能であるという意味において、LR よりも LAR のアプローチによる方が、生きられた宗教の「変化」をむしろ明確に示すことができるとも考えられるだろう。

マクガイアが述べた「ジェンダーと宗教」という視点に関しては、*Pantheon* の中でレアという女性の視点を通して日常を追体験するという工夫がなされたことによって意識が促された。つまりここでは、パラダイムを古代に移した場合にも、日常生活を生きる人の視点から宗教について考察する時に、女性たちの体験と視点を決して抜きにはできないという姿勢が、明確に打ち出されているといえよう。LR および現代の宗教研究一般において、女性の体験や視点を欠くことができないということは、今では共有された認識になってきているといえるだろう。しかし、古代の宗教研究においてその意識は今も希薄であるように思われる。*Pantheon* は LAR のアプローチを用いて、古代宗教研究における性差による視点の偏りに対しても修正を促しているように思われる。

以上の観点からだけでも、LR に基づく宗教研究が、LAR として古代にも適用され得る可能性と意義が示されたといえる。他方、LAR には上述で言及した弱みや再考すべき論点もあることから、LAR というアプローチに対するさらなる検討や、他の事例に応用した研究が現れることが望まれる。応用に関連して、*Pantheon* のブックレビューを行ったユダヤ

教ラビ文学の研究者ガヴァリャフ（2019）による、「ローマの宗教は変化するラビの概念や考え方を測るための基準となるものとしてしばしば不変のものと考えられていたのに対して、ローマ宗教が元来文字も形もないところから発展してきたものだ」という視点が印象的であった」という趣旨のコメントが印象に残る。*Pantheon* で描かれた時代の中でも、紀元 1-4 世紀はラビ運動が本格化した時代と重なるという⁽⁵⁵⁾。こうした関心から、LAR を応用した古代宗教研究について、例えば同時代のユダヤ教やその他の地域の宗教研究への適用と、それに対する分析や検討が期待される。

以上のことを、LAR プロジェクトの成果と *Pantheon* によって確認することができた。歴史において確認される「事実」と「想像力」を組み合わせることによって、宗教史研究の新たな地平が切り拓かれる可能性を、古代地中海世界を横断的かつ縦断的に視野に納めたケーススタディとして提示した *Pantheon* の意義は大きい。本稿ではその意義を確認できたが、上述の通り、同書に含まれた個々の方法論の検討や他のフィールドへの適用については、さらに今後の課題となる。

謝辞

本稿は、科研基盤研究 A：生きられた古代宗教の視点による古代ユダヤ変革期の東地中海世界の総合的宗教史構築（研究代表者：市川裕）の研究活動の一環として執筆した。2015 年にエアフルト大学で開催された IAHR 執行委員長であり、2019 年の日本宗教学会に招聘来日して下さったエアフルト大学マックス・ウェーバー研究所イェルク・リュプケ教授には、研究過程の諸側面において様々なご支援とご教示を頂いた。貴重な研究の機会を与えて下さった市川裕教授とイェルク・リュプケ教授に、この場を借りて心から感謝を申し上げます。また、本書邦訳（近刊予定）監修の松村一男先生には、貴重なご教示を頂いた。松村一男先生にお礼を申し上げます。

最後に、宗教学年報編集長および編集担当の田宮さんに、多大なるご支援を頂いた。忍耐に満ちたお気遣いと励ましに対して、心より感謝を申し上げます。

参考文献

- Jörg Rüpke (2012d): *Lived Ancient Religion: Questioning 'Cult' and 'Polis Religion'*, *Mythos* ns 5 (2011) pp. 191-204.
- (2016): *Pantheon -Geschichte der Antiken Religionen-*, C. H. Beck.
- (2018): *Pantheon -A New History of Roman Religion-*, Princeton University Press.

⁽⁵⁵⁾ <https://www.ancientjewreview.com/read/2019/9/9/book-note-pantheon-by-jrg-rupke>.（最終閲覧 2023/6/17）

The “LAR (Lived Ancient Religions)” Approach to the Study of Ancient Religions

—A Case Study of the Mediterranean World and Its Potential Applications—

Yumi DOI

In this paper, we will look at the book "Pantheon" (2016) by Jörg Rüpke (especially chapters 1, 2, and 6), which describes the "Lived Religion" approach to the study of religion developed since the late 1990s and applies it to the study of ancient Roman religion (2016) (especially chapters 1 and 2, and the flow up to chapter 6), which is based on the application of the "LAR" approach to the study of ancient Roman religions. First, overviewing the contents of the methodologies of "LR (Lived Religion)," "LAR (Lived Ancient Religion)," and "Pantheon," we will consider the possibility of applying the former approach to a broader range of regions and periods in order to study religious phenomena. As Hall pointed out, LR is an "imperfect tool" with a fluid, mobile, and imperfect structure. Rüpke's LAR applied to the paradigm of the ancient Mediterranean world is an even more incomplete approach regarding evidence-based scientific procedures. His "personal experience," on the one hand, is not mediated by "observation including participation" or "personal experience," which Orsi emphasized. Rüpke's "understanding through the senses," on the other hand, suggests that it should be examined even in ancient times, as was performed in chapter 2 of "Pantheon." As for the "relationship between religion and social and cultural change," it could be argued that LAR rather than LR would provide a more vivid picture of lived religion than LR by covering a long period of history. McGuire's perspective on "gender and religion" was also raised in "Pantheon," with a setting in which the history of religion is experienced from the perspective of a woman named Rhea. From these perspectives, it can be suggested that LR-based research on religion can be applied to ancient times, expecting further examples of its application to the study of ancient religions.